

祭

峠

三

吉

月は馴染みの姿を 雲間に浮かせ

夕は脚下に高まる

濡れを光りを 鏝子

わらし達は生きて

だがわれは 本当に生きておるのだからか

(ドニ チヤカ チヤカ チヤカ)

何と 消えゆく 記憶の 速さ

今宵 焼け跡の と或は河畔の 夏祭り

穿せ石木片れの 祠を囲んで カコラ 夕ガブーの様 人らはざわめく

踏みゆく瓦礫が 原子熱線の 爛れを 残して およこす

賽銭が ひらりと 舞ふ 十円や百円札で あよこす

みんな 寄り添って 思ひ込んで およこす

(ドニ チヤカ チヤカ チヤカ)

ふと 身にのぼる 焼傷の 白晝の あり臭い

女は 不思議な 羅衣 ウエモイ 男は 気取つて 浴衣かけ

何処から 出て来たのか みんな 本当に

何か 娘のことでも あらう ように

肩のいれ合おはかりに、^{スレ}往き六入

急ごし〜人の電飾のもで神樂は粉装重々しく

木^ノ葉^ノ鏡^ノけ^ノ、天^ノ岩^ノ戸^ノ、^押木^ノ飾

トニヤカ^ノヤカ^ノヤカ^ノヤカ^ノ (素志への傾向と遂に持たない諷刺の苦悶)